男女が互いの人権を尊重し、その個性や能力を十分発揮できる「男女平等参画社会」の実現は、現代の重要な課題です。

近隣の大学生にアンケート調査を行い、未来を担う若い世代は、男女平等意識をどのくらい身につけているのか。実態や動向など、下村美恵子さんに分析していただきました。

ジェンダー・フリー度はいま

私たちの生きている社会は、男性主導の性別秩序が強く機能しており、その結果不都合なことがらがとても多く生じています。性別秩序とは「女はこう、男はこう」でなければならないという社会の規範、またはその期待に沿うように育てられた結果、身についた規範（ジェンダー）とも言えます。それを私たちの社会がもっとも顕著に体現しているのが「男は仕事・女は家庭」とよく言われるところの性別役割分業です。

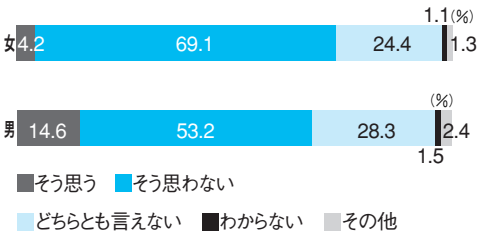
今回、大学生男女のジェンダーに関する考え方を示す貴重なデータを、興味深く拝見しました。回答された学生の方々が大半まだ1、2年生で、入試をクリアしてホッとし、いまは存分に学生生活を謳歌している時期でもあり、女だ、男だとさほど拘泥していないと思われましたが、何か「ヘン」という思いを持っていた人はかなりいました。

サンプル数
女性476人
男性207人

※注「ジェンダー」
文化的、社会的につくられた性差

問1

「男は仕事、女は家庭」という考え方について



自由記述では「兄は良くてどうして私は…」「なぜ女だから弟より家事手伝いを多くやらねばならないか」「一人旅とかは危ないと言われた」「幼少の時お転婆でよく両親を困らせた。その時女なんだからもっと女らしくしなさいと言われた」「人間を二つの類だけ（男・女）にとじ込めるのはおかしいと感じていた」など…。

これが3、4年生となると「現実社会との現実的な遭遇」、**つまり就職という課題が迫ってきて、改正均等法など法的な整備とは裏腹に、求職活動を通じてさまざまな矛盾や不条理を噛みしめる経験の一つや二つに出会い、そこで初めてあからさまな性差別を感じることが多々生じるものと思われます、特に女子学生は。**

今回の調査では「実際に体験したり、見聞きしたことから回答したと思われる」**【問2～8】ことへの回答と**「これからのことを想像して、自分ならこうでありたいと思う」**【問1および9～10】ことへの回答とに、大きく二つ分けて見ることができるかと思います。経験上言えることと、周囲の様子から学び取って言えること、どちらにしても現在の社会構造を背景にしていることは事実です。**

男女共同参画やジェンダーについての、どのデータや白書を見ても「男は仕事・女は家庭」**という性別役割分業を肯定するか否かを調査項目に挙げていますが、ここでもそれを第1の問いとしています。これで大まかな意識実態の方向性が探れるからです。**